



HIROSAKI  
UNIVERSITY

# 第16回 弘前大学 震災研究交流会

弘前大学のネットワークで震災研究を広げよう。

震災について、自治体とともに、学ぶ、考える。

日時 2013年1月28日(月) 18:00~20:00

場所 コラボ弘大1F コミュニティスペース

司会 片岡 俊一 弘前大学理工学研究科 准教授

18:05 ~

ごあいさつ

鎌田雄

弘前市 市民環境部 防災安全課 課長

18:15 ~

講演

「弘前市防災マイスター育成講座について」

米澤 朋也

弘前市 市民環境部 防災安全課

「東日本大震災が開く自治体間支援の可能性」

平井 太郎

弘前大学地域社会研究科 准教授

19:45 ~ 意見・情報交換

※ 震災対応や震災研究に興味のある方はどなたでも参加・聴講できます。

※ 当日、報告の後に、震災に関する情報・意見交換を行います。情報をお持ちの方はこの機会にご紹介ください。

※ 連絡会終了後、有志の懇親会を予定しています。

第15回震災研究交流会は2012年12月11日、八甲田ホールにて行われた。

講演の内容は以下のとおりである。

「除染研究の現状から見えてきた汚染農用地再生の可能性」

姜 東鎮 (弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター 准教授)

「放射線科学的手法による福島県浪江町復興支援活動」

床次 眞司 (弘前大学被ばく医療総合研究所 教授)

まず、姜さんは植物除染の専門家として放射線物質の「生物学的除染」に取り組まれていた。「生物学的除染」とは植物などの生物によって土壌中の汚染物質を除去することを指す。今回の震災でも一時期、「ヒマワリ」による除染などが報道を賑わせていた。しかし、現在、農水省が進める「農地除染計画」の軸は、こうした「生物学的除染」ではなく、土壌を直接削り取ったりする「物理的除染」になっている。なぜか。農水省は今回、実際にヒマワリ除染の効果を試験し、その結果に満足できずに「物理的除染」を選んだのだ。だが、姜さんはその結論に疑問が投げかける。農水省の試験はヒマワリ除染がもっとも効果を上げる環境条件を整えなかったものであり、条件さえ整えば結果は変わるというのだ。そんな杜撰な試験を農水省は行ったのだろうか。実は、姜さんによると、植物除染の研究自体が今回の震災まで、詳細な環境条件への目配りが足りなかったという。こうした反省にもとづき、姜さんは現在、福島県内でも異なる土壌条件の2地点で植物除染の実験を繰り返している。そこではヒマワリよりも生育の早いネピアグラスという植物が試されている。というも、今、除染の現場では一分一秒が争われているからだ。だからこそ、姜さんは植物除染だけで問題が解決できるとも考えていない。むしろ柔軟に、物理的除染をベースにしつつも、そうした削り取りの課題である「残土の減容」などに植物除染が寄与できると訴えるのである。姜さんの報告は、災害を契機にこれまでの科学の不十分さが明らかになったとき、真摯にそれを認めることでさらなる探究が始まること、さらに、科学の細分野のクロスオーバーも始まっていることを教える、聞く者に勇気を与えるものだった。

続く床次さんは放射線医療の専門家である。震災後結ばれた弘前大学と浪江町との連携協定にもとづきさまざまなプロジェクトの中心も担われている。今回はそのなかで、被災者の根柢的な不安に対する専門家としての応答に焦点が当てられていた。その不安とは「被爆の不安」である。どれくらいの放射能を浴びてしまったのか。将来を考えると、これすらわからない現状が被災者を苦しめている。もちろん、震災後、ある時点から放射線量の測定は始まっている。だが、もともとの自然放射線量がわからなければ被爆の正確な評価はできない。これに対し床次さんは事故前年の夏、東北を縦断し自然放射線量を押さえており、これが健康相談にも役立っている。この奇跡的な成果は、ご息子の自由研究に付き合った賜物であり、まさに奇跡と呼ぶほかない。さらに、床次さんは、セシウム137やヨウ素131など放射性物質の「核種」の違いに目を向け、よりきめ細かな健康相談に役立っている。一口に放射性物質と呼んだりセシウムばかりに注目したりしがちだが、核種により健康被害にも違いが現れるのだ。惜しむらくは、床次さんは「染色体分析による被爆の遡及的推定」を推奨しつつその結果が公表できないという。現状の「線量測定」や「体内残留物質測定」では健康被害を傾向としてしか言いえない。これに対し「染色体分析」は被災者一人ひとりの被爆と被害とを推定できる。もちろん健康相談の現場では「染色体分析」が活用されているのかも知れないし、あえて一般に公表する必要もないとも言えるが、現在、放射線医療の知見には社会から厳しい目が向けられている。たしかに社会の目に単純な誤解も含まれていたとしても、それは不安の裏返しから来る真実そして希望への願いである。科学の側も可能性の全てを明らかにする覚悟が求められていよう。そうした厳しさを私たち自身にあらためて突きつける報告であった(H)。

【連絡先】 弘前大学大学院地域社会研究科 檜楨貢研究室(教員室2)

Tel 0172-39-3938(内線3938) Mail himaki at cc.hirosaki-u.ac.jp